

論文の内容の要旨

論文題目 体制転換期インドネシアにおける「華人性」の諸相

氏 名 津 田 浩 司

本論文は、スハルト新秩序体制末期から改革の時代へと至る体制転換期インドネシアの地方小都市における「華人性」の諸相を描いた民族誌である。

近現代インドネシアにおいては、「華人であること」が社会的に大きな意味を帯びてきた。独立以降も華人系住民は、「華人はいつまでたっても華人である」として、陰に陽に差別の対象となってきたのだ。とりわけスハルト体制下では、国を挙げて対処すべき重要課題として「華人問題」が設定される中、「華人である」とされる人々が持っている「華人性」なるものが、抹消されるべき対象と位置づけられた。ただ、「華人は問題である」との言説が社会に溢れるのとは裏腹に、それが一体どういう意味において「問題」なのかは空洞化され、結果として逆説的ながら、「華人性」なるものは人々の日々の生活の中で遍在的に顕在化され、また再生産されるようにもなった。

学術面においても、従来インドネシア華人に関する研究ではしばしば、華人はプリブミ(かつて「原住民」と呼ばれた人々)社会に同化しているかなどといった類の問いが繰り返されてきた。しかし論理的に言って、華人が完全にプリブミ社会に同化しているならば、研究対象としての華人を取り出すことはできまい。つまりこうした問題設定は、あらかじめ「華人性」や「華人意識」を持った「華人」というものを固定的に捉えようとするものであったと言えよう。

インドネシアの華人に限らず、ある特定の民族や人種の区別が自明化されている社会においては、そこに直接的に国家の権力が介在していようがまいが、その人間分類のイデオロギーは現実に個々人の生活の前に大きな構造として現出する。それがいくら虚構であるとか錯覚であると言ってみても、実際にその只中に生きている人々にとっては、その圧力は様々な制度などを通じて払いのけられないものとして降りかかってくるのだ。そうして個々人に

振り向けられた分類と意味付与の暴力性に目をつむり、その圧力を蒙っている当人らの民族性やエスニシティの核(たとえば「華人性」や「華人意識」などと称されるもの)を闇雲に追い求めてみたり、あるいは状況的アイデンティティなどとして彼らの自発性や戦略的な営みのみを無批判にクローズアップするわけにはいかない。また、民族集団の生成の過程やそのイデオロギー性、そしてそれに伴う諸制度を外部から大局的に眺め批判するのみで、当該社会に生きる全ての人々が全面的にそうした分類イデオロギーに絡め取られていると考えるのもまた、短絡的である。

現代インドネシアの文脈で言えば、確かに「華人かプリブミか」の別は自明のこととして人々の生活レベルにまで入り込み、また法や制度、あるいは社会全般を覆う圧力などを通じて、「華人であること」や「華人性」といったものが日常的に意識させられてもいる。しかしその一方で強く確認しなければならないのは、たとえそうした様々な力によって生み出される強固な構造があろうとも、個々人の日常の営みというものは、必ずしもその構造のもとに全面的に回収されるわけではないという視点である。人々の生活実践は曖昧で一貫性がない雑多なものかもしれないが、それゆえにこそ、物事を一定の秩序のもとに配置しようとする構造化の力によっても絡め取られない、何かしらの広がりを持っているはずなのだ。

本論文では、このように「華人性」をめぐる諸力・諸制度が強固に働く現代インドネシアにおいて、「華人」として生きている人々の生活の場から、民族現象・エスニシティ現象としての「華人性」を捉えていくことに努めた。そこでは、「華人性」、あるいは「華人意識」などといったものを所与の固定的なものとは捉えず、むしろ人々の生活の中で具体的に「華人性」と呼び得るものが立ち現れるプロセスを、体制転換に伴って大きく揺らぎつつある当の諸力・諸制度そのものを照らし返しつつ、諸相ごとに明らかにした。

その人々の生活が営まれている場として本論文が焦点を当てたのが、厚い相互認知の連なりによって互いに「華人である」ことが了解されている「華人コミュニティ」である。それは、言わば「顔の見える」関係性で結びついた者同士が、生活実践に根差す中で意識するレベルの共同体であり、本論文では、空間的にも濃密な日々につき合いの上からも一定のまとまりを成すと当人たちによってイメージされている広がり、すなわち、あるひとつの小さな町で互いに「華人である」と認め合いつつ共に生活する人々の連なりを、便宜的に「華人コミュニティ」と呼んだ。ナショナリズムの起源と流行を論じる中で共同体を論じた B.アンダーソンは、このような対面状況の中で営まれる共同性について敢えて語ろうとはしなかった。しかし、彼が主張するような広く抽象的な形式によってイメージされるレベルの共同体(「顔の見えない」関係性)と、顔見知り同士の生活世界において成り立つレベルの共同体(「顔の見える」関係性)では、たとえ双方に共通して民族や人間集団にまつわる弁別の力が根深く入り込んでいるとしても、経験される豊かさの点においては両者には質的とまで言えるほどの差があると考えられる。

本論文の中心を成す3つの事例(第2章～第4章)は、この生活と密着した共同性の場である「華人コミュニティ」を舞台に、そこに降り注ぎ、またそこで生きられ、時にはそこで意識的に自己主張される「華人性」というものを、中部ジャワ北海岸に位置するルンバン(Rembang)県における筆者自身のフィールド調査をもとに、具体的かつ微細に描き出している。なおこのルンバン一帯は、古くから華人が定着した地として有名であり、ジャワ華人たちの間で故地のひとつとも目されている。

はじめの事例として第2章では、スハルト体制末期にルンバン町内にある2つの中国寺院が辿った地位変更過程を追った。そこでは、国の宗教政策と対華人政策によって生み出された磁場の中で、人々が当該寺院に「コミュニティ」の結節点としての役割を見出し、その過程でまさに上述の磁場に沿う形で「華人性」というものが意識化され、主張されていったのである。本事例は、「華人性」と呼ばれるものが人々の実生活の様々な行きがかりから事後的に立ち現れるプロセスを示すものであるが、これを通じて筆者は、民族現象やエスニシティ現象というものはあくまでもそれが立ち現れるプロセスの中で、そしてそれが立ち現れる諸々の相で見えていかねばならないと主張する。

第3章は、スハルト体制崩壊前後の混乱期にルンバンの華人たちが自己防衛のために作り上げたインフォーマルな組織(「影の華人組織」)の成立から消滅までの顛末を追った。1998年前後のインドネシアでは華人に対する暴力の嵐が吹き荒れていたが、自分たちも「狙われるチナ」であるとの思いを新たにしたルンバンの華人たちは、対処法を模索する中で、日頃彼らが生活している場である数百世帯から成る「コミュニティ」にシステムティックな形を与え、一致結束すべくひとつの組織を立ち上げる。さらには日常的にさほど密なやりとりのない近隣の華人たちとも連携し、広域の「華人ネットワーク」を結成するまでに至る。こうして従来共に生活する中で培われてきた関係性をはるかに深化・拡張する形ででき上がった体制だが、危機が去るとすぐに自然消滅に向かう。その経緯を明らかにすることで筆者は、逆に日常の生活実感を伴う顔の見える形で結びついた「コミュニティ」というものが、日頃どういう姿を持ち、また人々にどうイメージされているかを浮かび上がらせた。

第4章では、改革の時代に入り「華人性」を自由にアピールできるようになった環境下で、インドネシアの全華人の地位向上を目指して活動を展開しようとする中央(ジャカルタ)の華人団体関係者が企てた運動、すなわち、歴史上インドネシアに貢献した華人を見つけ出し、「国家英雄」に推戴しようとした運動の顛末を追った。この運動で脚光を浴びたのは、ルンバン一帯の中国寺院で長らくひっそりと祀られてきた歴史上の英雄であったが、それが突如インドネシアの全華人を代表する「国家英雄」に仕立て上げられようとすることに對して、地元の人々が冷ややかで無関心な態度を示したことが明らかにされる。この事例を通じ筆者は、ローカルな場で「華人である」ことを生きている多くの人々にとって、その生活の文脈を離れた「インドネシアの全華人」などといった広がり積極的に関与することに違和感があったことを、事例に即して説き明かしている。

以上のように本論文は、現代インドネシアにおいて「華人である」とされつつも、従来日々の暮らしの中で「華人性」なるものを顕示的に語ることのなかったような人々が、いかに「華人性」を捉え、現在進行中の体制変動の中でいかに「華人性」を生き、また主張していこうとしているのかを記述した民族誌である。そうして立ち現れる民族現象・エスニシティ現象としての「華人性」を具体的に諸相ごとに明らかにすることで、逆に現代インドネシアにおいて「華人(性)」なるものを取り巻く社会的枠組とその動態を照らし返すとともに、彼らの生活世界である「華人コミュニティ」というもののあり様をも浮かび上がらせているのである。